



## prelude

久しぶりにエンリッジに連絡をとった。どうしても伝えたいことがあったのだ。

通信の開始はこちらからしかできない。それは自分の立場が為せる特権。

向こうは夜だったらしく、エンリッジは寝ているところを叩き起こされたと笑いながら文句を言ってきた。彼は未だ、何も知らない。

あまり時間がない。長時間の通信はけっこう消耗する。手短に用件だけ伝えた。

「なあ」

通信を終えようとしたとき、不意にエンリッジが尋ねてき

た。

「……お前、大丈夫か」

「え、何が」

「もしかして……どつか具合悪いんじゃないか？ 何となく、そういう感じ、するんだけど」

「……」

なぜ、彼は。こんなにも遠く離れているのに、さらりとこんなことが言えてしまうのだろう。小さく笑って言う。

「こつちのことは何も心配いらない」

「嘘つけ！ だったらなんで真夜中にこんな……」

エンリツジは声を荒げかけたが、やがて諦めたように軽くため息をついた。

「どーせ理由聞いたって教えてくんねーよな」

「まあね」

僕は短く答えを返す。

「お前は言ったって聞かねーだろうけどさ……」エンリツジは言った。

「あんまひとりでためこみすぎんなよ。後になって『なんで言わなかったんだ』って言わせんなよ」

「はははっ」

——言えるわけがない。知って一番傷付くのは彼だから。知られるのは時間の問題だろう。それでも、今、ここでは言うわけにはいかない——

彼は怒るかもしれないけれど、何でも言ってしまうえば良いというわけではない。敢えて「言わない」ことも、相手を思いやる形の一つだと思っている。それはエンリツジも、レティ

もわかつているはずだ。過去に心に傷を負っている彼らだから。

「本当に大丈夫だから。さっきの件については、頼んだよ」

「待て！ また連絡入れろよ……でき……ば……昼間……に」

エンリツジの途切れがちな声を遠くで聞いた。僕は大きく息をついて、瞳を閉じる。闇の世界で、つかの間の休息を得るために。

そのとき。

心にふと灯った、何か明るいあたたかい光。驚いて目を開ける。

——まさか、これは、彼の『力』？

「かなわないなあ」

呟いて、ひとりで声を立てて笑った。

## 真夜中のお茶会

真夜中の念動力研究所。暗い庭を裏へ回る。所長の部屋レテイの窓は明るい。いつものように。

窓枠をコンコンと叩く。彼女レテイは読んでいた書物から顔を上げて僕を見て息を呑んだ。滅多に見られない表情を見れたから僕は満足する。

彼女は僕を中に招き入れてお茶を淹れてくれた。

「どうしたんだ、突然。何かあったのか」

「いや何も」

僕はそう言ってお茶をすする。いつものように美味しい。

「ただちよつと地上そとの空気が吸いたくなつて」

「そうか……」

彼女も少し表情をゆるめて湯飲みに口をつける。

しばらく二人で黙ってお茶を飲んでいた。

「評判は上々？」僕は顔を上げて彼女を見る。

「上々も何も」彼女は小さく息をつく。

「……まあ、お前は地上を救った英雄、だからな」

「悪くないね」僕は唇の端を持ち上げる。

「弟が落ち込んでいたぞ」  
アリス

「アリス君が？」

久しぶりに聞く懐かしい名前だった。昔は良く「ジュリア

姉ちゃん

は渡さない」とか何とか言われて決闘を申し込まれ

てたつけ……。その度に返り討ちにしてやったんだけど。も

ちろん、大人気ないから本気は出さなかったけど。

「アリスはお前のことを兄のように慕っていたからな」  
そうかな、と僕は小さくつぶやいてお茶をすすする。

「もつともアリスは、お前と私の仲を勘違いしていたようだが」

「それは光栄だなあ」

「本気で言っているのか？」レティは僕をじっと見つめる。

「アリス君は良いよね」ひとりごとのように僕は言った。

「将来さきがすごく楽しみだ。彼、真っ直ぐな目をしている。彼なら目標に向かって真っ直ぐに走れるんだろうな。……僕は道を踏み外してしまったけれど」

「何を言っている」

「僕は逃げたんだよ」

僕はお茶の残りを飲み干して立ち上がった。



「ご馳走さまレティ。美味しいお茶を有難う。また来ても良いかな」

「いつでも歓迎するが……、リロード、」

レティも湯飲みを置いて立ち上がった。

「弟に真実を話してやってはいけな<sup>アリス</sup>いか？」

「だめ」僕は即答する。

「そうか」

「今は未だだめ。でも……」

僕はレティと手を振って別れる。暗い庭を歩きながら確信に近い思いを抱く。

きっと彼とはまた会<sup>アリス</sup>うことになる。近いうちに。そう遠くない未来に。きっと。

## (1)

そして彼は来てしまった。僕の許に。もと

「お久しぶりです、リロードさん」

「敬語使えるようになったんだね」

僕は彼を見て微笑む。

「敬語くらい毎日使ってます」

実は彼に会ったのは彼ほど「久しぶり」ではない。「あのとき」、僕は彼に会っている。彼は氣を失っていたので僕のこと  
は見えていないけれど。僕は見ていた。

「あのとき」は流石の僕もキレた。いくらエンリツジが不死

身体質だといつても今度こそ彼も死んだんじゃないかと思っ  
た。<sup>エンリッジ</sup>

「生きてたんですね。こんなところで」

僕は黙って頷く。

「嬉しいです」

「ありがとう。……で、何しに來たのかな？」

彼——アリスは腰に挿した剣を抜き放った。

「決闘を申し込みに來ました」

僕は微笑む。

「言つとくけど、僕とレティは何でもないよ。少なくとも、  
彼女は僕のことを何とも思つちやいない。……少し残念だけ  
どね」

「姉ちゃんの恋愛事情に口出すつもりはありません」

「わかってる。冗談だよ」

「僕は昔の僕とは違います」

「それもわかってる。……強くなったな、アリス。すごくすごく強くなった。もう少しで……手に届きそうなところまで来てる」

「……色々、ありましたから」

「うん、そうだね」

そう。色々あって、彼は戦う意味のほとんどを失ったはず

なのだ。しかし、それでも、

「それでも戦いをやめないんだね、アリス」

「だってここでやめちゃったら……、意味がないじゃないですか。僕は約束したんです」

アリス  
彼が見据えるもの。それは、まだ遥か彼方にある。彼が自

覚しているかどうかはわからないけれど、気が遠くなるくらい、遥か彼方に。

「僕は通過点に過ぎないんだね？」

「はい」

彼は即答した。生意気。手加減はしてやらないことに決めた。

(2)

「……というわけでアリス君に戦いを挑まれたんだ。彼もだ  
いぶ強くなったけど、惜しい。まだまだだね。うん、例のと  
ころに運んでおいた。眠ってる。早く引き取りに来たほうが  
良いよ。アリス君は君<sup>キミ</sup>みたいにな。不死身体質。じゃないから。

放つとくと死んじやうよ。そしたら僕だつて後味悪いし、レティに口きいてもらえなくなるかもしれないし。だからよろしく、エンリツジ」

そして一方的に“通信”は切れた。前にもこんなことがあったよなあとエンリツジはため息をつきながらも“例のところ”へ急いだ。時刻はもちろん真夜中。リロードからの通信はいつも真夜中。嫌がらせなのか。リロードのことだ、わかっていてやっているに違いない。

「うわ——」

“例のところ”に辿り着いたエンリツジは思わず声を上げていた。月明かりの下、少年が血塗れで倒れているのを見下ろして、

「レティに見せらんねーだろ、この有様……」

エンリツジはかがみこんで少年をそつと抱き起こした。もちろん生きてはいるし、エンリツジに治せない傷ではない。しかしリロードの言葉通り、生きているのが不思議なくらいの怪我だ。

「ここまでやるかなー。まじで完膚なきまでに叩きのめした、って感じだな」

エンリツジは本日二度目となるため息をつく。リロードに余計なことと言って怒らせたんだろ、アリス。

「つていうかそもそもレティなのか？ けしかけたの……」でも、とエンリツジは思う。こいつ目覚めたら、また必死で修行して、またもつと強くなるんだろうな。そして何度でもリロードに戦いを挑むのだろう。何度負けても、何度でもリロードを倒すその日まで。

\*

アリスを治癒して、念動力研究所に運んで、新しい服に着替えさせて、ベッドに寝かせて、エンリツジはレティの部屋を訪ねた。

「けしかけたわけじゃないぞ、私は」とレティは言う。

「アリスは恐いもの知らずなだけだ。今のアリスが勝てるわけないだろう、リロードに」

「まあな」エンリツジはうなずく。

「リロードに勝てるのは多分、今のところ、大陸でただ一人だけだよな」

「そういうことだ」



「でも、もしかしたら、アイツそのうち本当にリロード倒しちまうかもしれねーよな」

「……」

「レティ、複雑？」 エンリツジは笑みを投げかける。

「いや……。それはむしろ嬉しい、と思う。アリスは大切な弟だし」

「リロード倒した後のことを考えても？」

レティは十分に考え込んでから口を開いた。

「……やっぱり、複雑だ」

ちよつとだけリロードが哀れになってエンリツジは苦笑した。

\*

「勝てると思ってました」

ベッドで目覚めたアリスはエンリツジを見上げて言った。

「だってリロードさんが負けた相手に、僕たち勝ったじゃないですか」

「僕『たち』だろ」

エンリツジは再びため息をついた。……まさか勝てると思って戦いを挑んでいたとは。しかも理屈が間違っている。

「良いかアリス良く聞け。確かにリロードは“ヤツ”にサシ勝負で負けた。……まあ、どう言い訳したところで『負けた』

んだろうな。じやなきや俺たちがあんな窮地に……ま、それはそれとして。でも今のリロードはあのと時のリロードとは違う、はずだ。あのリロードが負けたまま何もしてないとは

思えないからな。そして俺『たち』は“ヤツ”を倒した。でもなあ、あれは頭数があつたからだろ。アリス、お前一人で“ヤツ”に戦いを挑んで勝てたと思うか？ ……そういうことだ。わかったよな？」

「あつそうか」アリスは素直に納得した。

「まだまだ甘かったなあ、僕も」

「うんうん、ひとつ成長したな」

「でもリロードさんの強さはわかりました。次は勝ちますよ」

「へー。でもリロードって滅多に“本気”にならねーんだぜ。

お前が戦ったのは、本当に本気のリロードだったのか？」

「本気か嘘気かくらいわかりますよ」

「それはどうかな」

「とにかく、こんなところでこうしちゃいられないな。修行

修行！」

アリスは勢い良くベッドから起き上がった。

「おいつ、病み上がりだろ、無茶するなよ」

「時間が惜しいんです」

ああそうか、とエンリツジは思う。当然、リロードも何度でもアリスに戦いを挑まれることに気付くだろう。リロードだってこんな年下の少年に簡単に倒されるわけにはいかないに決まっている。

しかも、そのリロードでさえ、アリス彼にとっては通過点に過ぎないのだ。

「お前が進もうとしてるのは、とんでもない茨の道だな、アリス……」

でもアリスは自分にもリロードにもできないことをやって

くれそうだから、エンリツジは彼の成長を楽しみに見守ることにする。それはエンリツジだけではなく、レティも。おそらくロードも。